

は し が き

「ヨーロッパ統合運動の父」と称えられるリヒャルト・ニコラウス・クーデンホーフ・カレルギー伯爵（1894～1972年）が、29歳で『汎ヨーロッパ』を世に問い、「ヨーロッパは統合しなければならない」と訴えた当時、欧州統合は、夢のまた夢のように思われた。

それから30年あまりが経過した1952年、欧州石炭鉄鋼共同体（ECSC）が創設され、カレルギー伯爵の夢は、実現に向って少しずつ動きだした。欧州統合の流れは、その後、EEC（欧州経済共同体）やEC（欧州共同体）を経て、今日のEU（欧州連合）に至っている。2004年5月にEUは、旧社会主義国であった中・東欧8カ国等を統合し、欧州の悲願とも言うべき「東西欧州の統一」を実現した。

ブルガリアとルーマニアが新たにEUに加盟した今年（2007年）は、EUにとっても、一つの節目となる年である。欧州統合の第一段階ともいうべきECSCの誕生からは55年、EECの設立を決めたローマ条約の調印からは、50年目にあたる。EUは、今や加盟国27、総人口約4億9千万人を誇る巨大経済圏に発展し、経済規模においても、米国をしのぐまでになった。しかし、加盟国は多種多様であり、様々な問題を抱えている。地域格差や経済格差問題、移民の問題等は、とりわけ大きな課題となっている。

一昨年、フランス、オランダが、国民投票により、欧州憲法条約の批准を否決したことは、EUが新たな「危機」に直面していることを、象徴的に物語っている。EU組織の経年劣化や、補助金等の情報公開の不十分さ等も指摘されている。これまでのEUの発展過程は、「危機」の連続であり、その中からEU自身が解決策を見出し、飛躍してきたともいわれる。目下、懸案となっているトルコ加盟問題も、新たな発展を探る中で、「ヨーロッパとは何か」、「多様性の中での統一とは何か」を問うものとなっている。

調査及び立法考査局では、平成17 - 18年度の総合調査のテーマに、「拡大EUの現状と今後の課題」を取り上げ、調査を進めてきた。このたび、国内・海外出張の成果等も織り込んだ形で、報告書を取りまとめた。この報告書が、国政審議に資することを願うものである。

当総合調査への参加メンバーは、あとがきに記すとおりである。

平成19年3月

調査及び立法考査局長

松 橋 和 夫